

銀座の地元商店主による街づくり運動の系譜

—戦前から戦後にかけて構築した議論の枠組みに注目して

A Context of Movement for Urban Design by Local Proprietors in Ginza
—The Construction of Framework for Practice from Pre-war to Post-war

宮下 貴裕 東京大学大学院 工学系研究科 特任研究員
Takahiro MIYASHITA

1. はじめに

明治6年の煉瓦街建設以来、銀座は活発な開発行為の蓄積によって自由でモダンな繁華街としての地位を確立してきた。しかし様々な建築家や行政当局によって生み出されてきた空間だけが街の歴史を表すのではない。地元の主体に目を向けると、1919年に設立された商店街組織・銀座通連合会(当初の名称は京新聯合会)は、今日に至るまで銀座の都市空間に対して高い関心を示し、街のアイデンティティや目指すべき空間像などに関する議論を蓄積させてきた。その象徴と言えるのが中央区との協議を経て1998年に策定された地区計画「銀座ルール」であり、地元側の都市に対する意識が都市計画制度に反映された事例として多くの人の知るところとなっている。銀座通連合会が都市計画行政に関与する枠組みは、1988年に中央区と「銀座地区まちづくり協議会」を組織したことが契機となって構築されたが、実は彼らの銀座における都市空間デザインに向けた運動は、そのはるか以前から自発的かつ継続的に展開されてきたのである。

組織の設立以降、銀座通連合会には銀座通り沿道に立地する商店や企業の経営者が理事として名を連ね(1950年からは晴海通りも加わる)、行政当局に対しても大きな発言力を有してきた。今日の「まちづくり」という概念がまだ存在しなかった戦前から戦後にかけて、彼らは独自の構想立案や行政当局への働きかけなどを通じ、国道である銀座通りにおいて新たな空間デザインを実現させようと試みてきた。それは地元の生活者という立場から発想された個性的なアプローチによって展開され、時には専門家をも巻き込みながら実践のための議論の枠組みが構築されていった。

現在、銀座通連合会の事務所には戦前から蓄積された様々な内部資料が保管されている。中でも1936年

から200冊近く作成されている新聞記事スクラップブックや定時総会・常務理事会といった会議の議事録は、各時代の人々が銀座の街に対して抱いた問題意識や未来像を今に伝える貴重な史料と言える。組織内部での議論の詳細や共有された街のイメージの変遷、そしてその歴史的意義については、銀座通連合会のご協力を得て共著『時間の中のまちづくり』(鹿島出版会、2019年)にまとめた¹⁾。本稿では戦前から戦後にかけて地元による街づくり(現在における「まちづくり」と区別して呼ぶ)の枠組みがどのように構築されて運動に還元されたのかを紹介し、その系譜を整理したい。

2. 皇紀2600年を目標とした1930年代の運動

1930年代、銀座通連合会は「都市美」の実現を目標として、銀座通りの新たな空間デザインと道路環境の改善を求める運動を展開した。その萌芽は1933年7月、銀座通りの地下で行われていた地下鉄銀座線の開通工事にあわせて、歩道に乱立する電柱を撤去し電線の地中化を行うというアイデアを思い立ったことに見られる²⁾。そしてこの提案に前向きな姿勢を見せた都市美協会と連携して運動に取り組むこととなった。都市美協会は、都市研究家の椽内吉胤を中心に1925年に設立された都市美研究会を前身とする運動団体で、石原憲治をはじめとする東京市の役人も多く参加していた³⁾。当時の新聞は、このような動きが「醜い電柱だけが、明治時代と少しも変らぬ姿で無作法に突っ立ち、これは『日本の社交場』を誇るモダン銀座を傷つけること甚だしい」という地元商店主らの意識に基づいたものであると報じた²⁾。彼らにとって「都市美」とは、道路空間と沿道建築の壁面によって構成される領域の視覚的な「美」を意味していたと考えられる。

銀座通りは国道であったが当時道路空間の管理は東



写真1 「銀座検察隊」の会合での石川栄耀(1936年)
提供 銀座通連合会

京市が担っていた。銀座通連合会は市とのつながりが強い都市美協会と共同で運動に取り組むことで行政当局に対する発言力を高め、自らの主張を実際の空間デザインにつなげようと企図したのであった。この段階で東京市が電柱の撤去を検討することはなかったものの、1934年5月には銀座通連合会と都市美協会が共同で銀座通りの新たな舗装のあり方を議論する「銀座舗装座談会」を開催し、その結果として歩道の再舗装を実現させている⁴⁾。

そして1936年7月、東京オリンピックと日本万国博覧会が皇紀2600年を迎える1940年に開催されることが決定すると、銀座通連合会は電柱の撤去に加えて銀座通りを走行する市電の廃止も運動のテーマとして掲げるようになった。彼らは当時の銀座通りに市電の架線が張り巡らされていたことを問題視し、「都市美」を合言葉として1940年までに電柱や市電のないすっきりとした道路空間を実現させることを思い描いたのであった。スクラップブックの作成を始めたのがこの年であり、そこには彼らの運動を報じる記事の他にもオリンピックや万国博に関する記事が収録されていたことから、国家的行事が行われる1940年という年を運動の達成目標として認識していたと考えられる。

しかしこのような提案に対して東京市の反応は芳しくなく、特に市電の廃止については、運賃が市の貴重な税収となっていたことから極めて消極的であった。そこで銀座通連合会は当局へのアピールのための新たな連携相手として日本都市風景協会に注目する。これは都市美協会の創設者の一人である椽内吉胤が立ち上げた新しい団体で、同じく都市美協会のメンバーであった石川栄耀のほか、岸田日出人や長谷川如是閑(ジャーナリスト)、福原信三(資生堂社長)など民間の有力者が多く参加していた³⁾。銀座通連合会は、市当局の関係者が多くを占める都市美協会とは異なり自由な立場から活動できる都市風景協会と連携することで、



写真2 「銀座検察隊」による騒音調査の様子(1936年)
提供 銀座通連合会

突破口を見出そうとしたと考えられる。彼らは合同で「銀座検察隊」という運動体を組織し、同年11月に銀座通りの視察と運動方針の決議を行ったほか、12月には最新機器を用いた騒音調査も実施した。その取り組みは新聞でも大きく報じられ、銀座通りの市電が生み出す騒音は「人体に危険」という見解が示された⁵⁾。

さらに1937年1月、銀座通連合会は10年という長期的視点から「銀座改造計画」と名付けた独自構想を発表した⁶⁾。ここでは「昼間の一定時間バス以外の自動車の通行を禁止する」「小公園を各ブロックの路上に整備し空気の清潔を保つ」といった案が掲げられ、地元商店主らの描いた銀座の未来像が社会に対して発信された。結果的にこれらの運動は東京市に市電の廃止を決断させるまでには至らなかったものの、電柱の撤去については銀座通連合会と東京市の間で継続的な協議が進められ、1937年2月、ついに合意を見る。しかしこの決定は1938年6月、戦時体制下における統制経済の影響から大蔵省が市の起債を削減したことで白紙化され、中止に追い込まれてしまった⁷⁾。

それでも他団体との連携による運動、独自の都市構想の発表、行政当局との継続的な協議といった多様なアプローチから自らの思い描く空間像の実現が目指されたことは、銀座の人々の街づくりの系譜における大きなエポックとして捉えることができる。

3. 戦後における運動の再開

1945年、銀座は東京大空襲によって大きな被害を受け多くの建物が焼失した。しかし銀座通連合会は終戦を迎えた8月から商店街の復興に着手し、木造の仮店舗建設や「銀座復興祭」の開催などに取り組んだ。同年12月には独自構想として「銀座復興計画」を立案し、戦前からのテーマである電柱の撤去と都電の廃止に加え、街路樹のヤナギからイチョウへの変更、建物高さの

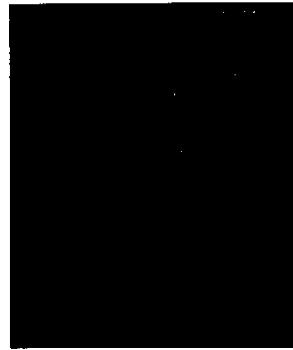


図1 意匠登録された街路灯のデザイン
提供 銀座通連合会



写真3 御影石舗装が実現した銀座通り歩道(1968年)
提供 銀座通連合会

最低限度規定の導入などを東京都に提案している⁸⁾。
また当時の銀座通りは東京都の管理下にあったが、都に財政的余裕がないことから実質的に銀座通連合会が管理者としての役割を果たしており、1950年には戦時中の金属供出で撤去されていた街路灯の新たなデザインを選ぶコンペを開催した。石川栄耀ら専門家も審査員として招かれ、選出された新街路灯デザインは銀座通連合会会長の名義で意匠登録された。石川は1953年にも銀座通連合会主催の勉強会に招かれており、戦前から引き続き銀座との強い結びつきが見られた。
さらに1957年には銀座通りの未来像に関する懸賞論文の募集を行い、谷口吉郎や磯村英一らを審査員に招いた。そしてその入選案を基に銀座通連合会の運動方針が「銀座改造案」として策定され、建物の高さ統一と共同建築の建設推進、ショーウィンドウの連続的配置などが掲げられた⁹⁾。専門家の知見を得ながら地元で共有される問題意識や空間イメージを社会に発信するというアプローチは、戦前の運動とも共通するものであると言える。

4. 当局の道路整備事業への「参画」

オリンピックの開催は戦前と同様、地元商店主らの空間デザインに対する関心を高める効果をもたらした。1963年、銀座通連合会は翌年に控えた東京オリンピックまでに銀座通り歩道の再舗装を実施するよう、1956年から道路管理者となっている建設省東京国道工事事務所に陳情を行った。国道工事事務所はこの要望を受け入れ、当時の最新技術であったカラーアスファルト舗装の実施を決めた。ここで注目すべきはアスファルトの色彩の選定が銀座通連合会に委ねられたことであり、同会常務理事を務めていた服飾デザイナー・木村四郎の発案で、歩行者の服装との調和という観点から「ビジョン」(ベージュ系)が採用された¹⁰⁾。当時、地

元の商店街組織が国道の空間整備に対して何らかの決定権を有するという制度的枠組みが存在したわけではない。それでも銀座通連合会と当局の間で構築された信頼関係から、国道工事事務所が独自の判断として地元側の希望を汲み取る方針を採るに至ったのである。
長年のテーマであった都電(旧市電)については、1955年から東京都に対して廃止を求める陳情を再開し、都議会での審議を経た1967年、ついに廃止が決定する。すると銀座通連合会は早速国道工事事務所に対して軌道の撤去工事と連動した銀座通りの大規模改修を要望した¹¹⁾。国道工事事務所側がこれに応じる姿勢を示すと、さらに都電の敷石に使用されていた御影石を歩道の舗装に転用するというアイデアを提案し、通常の舗装を実施した場合との差額である5,000万円を地元側が負担することで合意に至った。この大規模改修では共同溝の埋設によって電線の地中化が実施されたため、銀座通連合会が戦前から目指してきた電柱の撤去と都電の廃止が同時に実現することとなった。改修工事は都電の運行が終了した1967年12月9日の深夜から着手され、翌年には片側75cmずつ拡張された電柱のない御影石舗装の歩道空間が竣工した。

5. 祝祭空間としての銀座通り

1960年代、銀座通連合会は国道工事事務所と道路空間整備に関する協議を進めながら、並行して銀座通りを舞台とした車両通行止めを伴う大規模行事の開催を計画していた。1965年には道路空間の使用に関して銀座を管轄する警視庁築地警察署への接触を開始する。しかし戦後になって銀座通りで通行止めが実施されたことはなく、デモなどの政治行動を誘発することへの懸念から警察側は難色を示した。すると銀座通連合会が中心となって組織された「大銀座祭実行委員会」は、総理府の後援を得ることで警視庁との交渉を有利に進

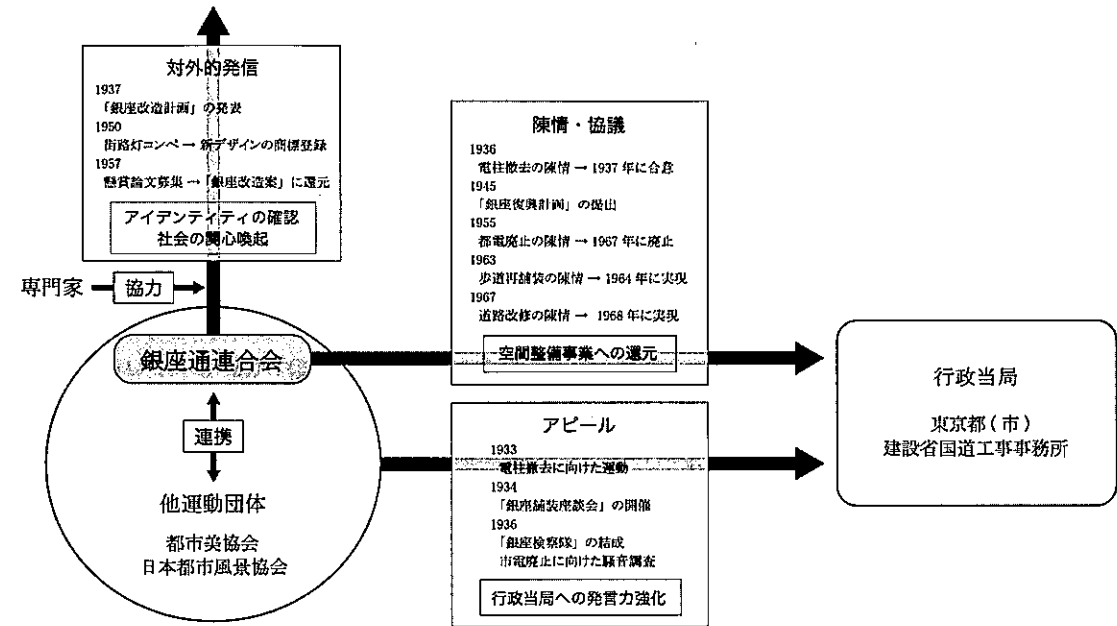


図2 銀座通連合会が戦前から戦後にかけて展開した運動の枠組み

めようと企図し、これが実現したことによってパレードのための道路使用に許可が下りる見通しを得た¹²⁾。
こうして1968年10月11日、改修工事が完了した銀座通りで「明治百年記念大銀座祭」が開催された。「光のパレード」では様々な花自動車が車道を走行し、歩道ではワゴンを用いた販売イベント「銀座ワゴンセール」が行われた。歩道における商行為は認められていなかったものの、築地警察署は建物に沿ってワゴンを並べることで、店舗敷地の延長における「荷台の出張り」との認識で黙認し、祭りに協力した。
銀座通連合会は戦前からの運動目標をついに達成し、あわせて新しくなった道路空間を用いた行事の開催も実現させた。そこには行政当局との間に構築された強い結びつきが存在しており、国道工事事務所や築地警察署なども、現場の判断として地元商店主らの要望に柔軟な対応を示していたことがわかる。

6. 地元による街づくりのコンテクスト

本稿では、銀座の商店街組織である銀座通連合会が1930年代から1960年代にかけて取り組んだ運動の展開に注目した。彼らによる一連の動きは、都市空間整備を担う行政当局への陳情やアピール、そして社会一般に向けた独自構想の発信やイベントの開催といったアプローチを通して展開された。前者は当局の事業に自らの思い描く空間イメージを少しでも反映させようとする現実的議論、後者は非現実的なアイデアも含んだ理想像の提示によるアイデンティティの確認作業

という性格を有していた。1960年代以降、わが国では住民運動の活発化や革新自治体による市民参加の枠組み構築などによって「まちづくり」という言葉が定着したが、銀座では商店街組織が主体となって、戦前から独自の街づくりのコンテクストを生み出していたことがわかる。銀座通りは国道であるため、彼らが自らの手でデザインした都市空間は決して多くない。しかし運動の展開とそこで構築された枠組みに注目すると、これまで行政当局による都市計画事業の結果として考えられてきた空間デザインの蓄積は、実は地元商店主らによる継続的な議論の成果でもあることに気づかされる。時間の中に埋もれた地元の人々の思索と議論の軌跡を明らかにし、そのプロセスに価値を見出すことは、今後自らの街の未来を新たに描いていく上で非常に大きな意味をもつと考えられる。

<参考文献>

- 1) 小林敬一・黒石いづみ・中島伸・宮下貴裕(2019)『時間の中のまちづくり—歴史的な環境の意味を問いなおす—』鹿島出版会
- 2) 東京朝日新聞1933年7月2日朝刊
- 3) 中島直人(2009)『都市美運動 シヴィックアートの都市計画史』東京大学出版会
- 4) 東京朝日新聞1934年5月17日朝刊
- 5) 時事新報1936年12月22日朝刊
- 6) 東京朝日新聞1937年1月21日朝刊
- 7) 読売新聞1938年6月29日朝刊
- 8) 毎日新聞1945年12月12日朝刊
- 9) 読売新聞1958年6月7日朝刊
- 10) 「銀座通連合会常務理事会議事録」1964年4月14日
- 11) 銀座通連合会(1967)「一般国道15号線の歩道補修に関する陳情」
- 12) 銀座1968年5月20日